博 士 学 位 論 文

内容の要旨
および
審査の結果の要旨

博甲第１１号

令和３年度（２０２１年度）

京都文教大学

はしがき

本編は、学位規則（昭和２８年４月１日文部科学省令第９号）第８条による公表を目的として、令和３年９月１７日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨、論文審査の結果の要旨を収録したものである

学位記番号に付した甲は、本学学位規則第３条第１項（いわゆる課程博士）によるものであることを示す。

目　　次

学位記番号	学位の種類	氏名	論文題目	頁
博甲第 11 号	博士(臨床心理学) （京都文教大学）	芝田和果	日本昔話の臨床心理学研究序説―『日本昔話大成』に描かれた「狂」を中心に―	1

氏　　名	芝田　和果
学 位 の 種 類	博士（臨床心理学）（京都文教大学）
学 位 記 番 号	博甲第１１号
学位授与年月日	令和３年（２０２１年）９月１７日
学位授与の要件	京都文教大学学位規則第３条第１項の規定による
学 位 論 文 題 目	日本昔話の臨床心理学研究序説―『日本昔話大成』に描かれた「狂」を中心に―
論 文 審 査 委 員	主査　教授　禹　鍾泰
	副査　教授　濱野　清志
	副査　教授　松田　真理子

論文内容の要旨

問題

本論文は，深層心理学的な心の理解，及び臨床実践のための研究素材として日本昔話や民俗学領域の知見群を十分に活用するために，網羅的検索を用いた昔話研究の可能性に言及したものである。科学的な筋とは異なる視点で事物を捉え直す機会を提供する昔話は，私たちが普段あまり意識を向けていない深層部分の心のはたらきを理解するのに役立つと言えるが，深層心理学領域において昔話が引用される時，多くの場合，その引用過程は不透明であり，引用は引用者のヒューリスティック的選抜に任される傾向がある。もちろん，ある心的現象にぴったり合った昔話を直観的に選び取る技にこそ，臨床家の専門性やセンスは光るものではあるが，それは昔話に精通した一部の研究者に限られた技でもある。今後，臨床心理学領域において昔話という豊かな素材がより広く用いられるようになるためには，引用者の恣意性を越える試みとしてその走査過程を明示することが一つの方法として有用と思われる。

日本昔話の網羅的検索といっても，すべての日本昔話を網羅することは不可能であるので，本論文では『日本昔話大成』（関敬吾, 1978-1980, 角川書店）（以下，『大成』）を昔話世界の標本とみなして，ここに収録された昔話群の要約文を網羅的に検索することにした。『大成』は明治末年から昭和 51 年末の間に語り手から直接採集された沖縄県から青森県，及びアイヌ民族の昔話，およそ 34,000 話余が話型分類によって体系づけられ収められた全 12 巻の書物で，そこに報告された話型数は合計 740(亜型を加えると 825)である。構成は，第 1 巻が「動物昔話」，第 2 巻から第 7 巻が「本格昔話」，第 8 巻から第 10 巻が「笑話」と「補遺」，第 11 巻が索引群の掲載された「資料篇」，第 12 巻が 16 名の知識人たちの寄稿論文からなる「研究篇」となっている。

本論文では，日本人の間に共通して感じ取られてきた「たましい（タマ）」の文化的集合性を帯びたイメージや観念を捉えるため，「たましい（タマ）」，荒ぶるたましい（タマ）の一側面としての「狂」，狂女としての「山姥」，時に山姥と重ね見られる「アマノジャク」を対象として，『定本柳田國男集』（以下，『定本』）に掲載された柳田の論考群と『大成』に描かれた日本昔話をそれぞれ網羅的に検索し，特徴群を整理する。「狂」については発症の契機やその後の展開を，「山姥」や「アマノジャク」についてはコミュニティにおける位置づけや人間との関係を検討し，荒ぶるたましいに対する日本的な心理臨床上の関わり方のヒントを探る。

構成と概要

本論文の目的は，日本昔話を網羅的に活用した深層心理学的研究の試みと，昔話を心理臨床上のツールとして用いるために必要と思われる基礎知識の把握であり，第 1 部（第 1 章～第 4 章）が前者の目的に，第 2 部（第 5 章～第 7 章）が後者の目的にそれぞれ対応している。

第 1 章では，日本に暮らす人々のうちに自然発生した観念としての「日本人のたましい観」を掴むために，『定本』に掲載された柳田國男による「たましい」に関する記述と，『大成』に描かれた「たましい」にまつわる昔話群を網羅的に集めて，その特徴を検討した。筆者の関心はたましいの実体や所在に関することではなく，「たましい」という語を用いて日本人が表現しようとしてきた共通の心象あるいは観念であり，これを記述することが第 1 章の目指すところである。柳田の記述から，たましい（タマ）は神様からの授かりものとして観念されていたこと，そしてたましい（タマ）には遊離したり，依りついたり，宿るといった特性が観念されていたことがわかった。日本昔話においても，この「たましい観」と矛盾しない現象理解や，死後に対する解釈が表現されていることがわかった。日本昔話に「たましい」が登場する文脈が生死の境や精神的な極限状況といった死との親和性がある一方，柳田が記述した「たましい」に関する習俗では，タマを活性化する儀式や，暴威を振るうタマへの態度や関わりといった，生に軸足が置かれているものが多いことが特徴的であった。

第 2 章では，荒ぶる「たましい」の一側面としての「狂」に着目して，「狂」の状態像を精神科領域における精神病名からの記述，文学領域における記述，『定本』から柳田民俗学領域における記述，『大成』から日本昔話における記述をもとに検討した。精神科領域や柳田民俗学領域の記述から，「狂」の語には回転運動のイメージが伴っていることが示唆された。また，精神症状の変調や愚かさという次元にある者が，日本の一部の祭や笑いにおいては重要な役割を果たしていたこと，そしてそれがコミュニティ内の密な人間関係で生じる緊張を氷解させるための文化的態度であった可能性を指摘した。さらに，昔話に登場する「狂」状態とは「急激な感情の極まりを契機に人間としての姿やありようを留めておくことが出来なくなる，あるいは人間たらしめる何かに亀裂が生じる状態」と表現できるかもしれないこと，その症状形成からしても今日の精神病圏とも異なる精神状態であること，強調語として用いられていた可能性もあるためにゆるやかな意味で捉えておく必要があることを指摘した。同じ話の筋を辿りながらも「狂」の語が登場しない類話を，「狂」に

向かわなかったケースと仮定し，その転回点を検討したところ，「態度の軟化」を挙げることができた。父性的直面化が態度選択の一分岐点となるが，この時に現実をありのままに受け止められるかどうかや，目先の欲を手放せるかどうかが問われることとなり，その際の精神のしなやかさが態度の方向性を決め，「狂」以外の変容の道に開かれる可能性を指摘した。

第 3 章では，「狂」の状態像への理解を深める目的で「山姥」に検索対象を広げた。前章と同様に『定本』と『大成』の記述から，その容姿や正体，行動特徴，そして人間との関わりについての描写を網羅的に収集して特徴をまとめて，山姥の集合的無意識のイメージへの接近を試みた。山姥の正体に関しては柳田の「獣説」「人間説」「超自然的存在説」を紹介した。山姥の容姿的特徴については『定本』でも『大成』でも，山で長年暮らしたゆえの粗野な風貌を記述したものが多かった。日本昔話に登場する山姥の行動は，大食，人食い，追いかけ行動，変身や変装といった恐怖を抱かせるものと，母性や人間らしさのうかがえるような温かみを感じさせるものの両方が描かれていた。

また，日本の心理臨床における心的力動や事例の理解に日本昔話の山姥のイメージが役立つ可能性を，29 歳独身男性とその母親の事例を通して論じた。持ちつ持たれつの母子関係にどのような精神的境界を引くのがふさわしいのかを模索する心理面接過程で，最終的には太母に包まれながら夫婦という小世界を作るという結婚のあり方におさまった展開を紹介した。母子間を分断する母子分離や自立のイメージよりも，大きな山姥の存在に抱かれつつ，その中でそれぞれの家庭を形成する日本人の里暮らしのイメージの方が，この母子が選択した歩み方と近いように思われた。

第 4 章では，「山姥」と重なりのある「アマノジャク」に対象範囲を広げ，アマノジャクにまつわる柳田の論考群と，アマノジャクが登場する『大成』掲載の日本昔話から，その容姿や正体，行動特徴，そして人間との関わりについての記述を網羅的に収集し，それらの特徴をまとめた。アマノジャクは，地方によっては山姥のような山の霊威と見られたりすることもあるが，厳密には天探女（あめのさぐめ）にルーツを持つ意地悪な魔物であり，本来的には山姥とは別存在であることがわかった。日本昔話「瓜子織姫」に出て来るアマノジャクの容姿的特徴としては，長く太い尻尾があり，女児や女性の（化け）姿で登場する例が多かった。アマノジャクの行動特徴のうち，山姥と共通して見られたものは変装と大食であった。山姥との相違点としては，山姥が時に温情的側面を見せる昔話のある一方で，アマノジャクがそのような温情を見せる昔話は，親の死の際に限っては“あまのじゃく”にも従順になったという「鳶不幸」を除き，見当たらなかった。また，山姥の凶暴的側面は生理的欲求や親和欲求に素直に猛進するゆえの結果であり，どちらかというとまっすぐさが裏目に出る例の多い一方で，アマノジャクの凶暴的側面には意地悪な下心が働いており，へそ曲がりであることが特徴的であった。

心理臨床におけるアマノジャクのイメージを検討するにあたっては，ある犯罪事件に接触することになった女性クライエントの事例を通して，その加害者に見るアマノジャク性と，その女性クライエントの心に与えた影響について検討した。日本昔話では茅や蕎麦の根の赤さをアマノジャクや瓜子織姫の血に見立てる植物由来譚で締めくくる例が多いが，瓜子織姫の悲劇やアマノジャクの恐ろしさをリアリティをもって後代に渡って人々の心に刻み

続けることが，昔話に学ぶ日本的なアマノジャクへの対処法である可能性について考察した。第 1 章で指摘した「たましい」の荒々しい側面や，第 2 章で指摘した緊密な関係性が「狂」のリスク要因となりうることを踏まえると，いかなる者もアマノジャクに遭遇したり，あるいは転じたりする可能性のあることをどこか頭の片隅に置いて生きることが「思わぬ時」に登場するアマノジャクに対する現実的対策と思われた。

第 2 部は昔話を心理学領域で用いるために必要と思われる基礎知識の把握を目的としているが，通底するテーマは「昔話とは何か」という問いである。第 5 章では，昔話を学問的に体系づけてきた民俗学における昔話の研究史を概観した。昔話の発祥地と伝播のルートを探ろうとするアプローチ，昔話の着想源や原形に関するアプローチ，昔話がいつどこで誰によって何のために語られたのかを検討する生態学的アプローチ，昔話の機能や構造に関するアプローチを紹介し，これまでに提出されてきた「昔話とは何か」に対する仮説群を概観した。

第 6 章では,『関敬吾著作集』の第 1 巻から第 6 巻（同朋舎, 1980-1982）を底本として，民俗学領域における昔話，及び周辺概念の定義を紹介した。一般的には散文伝承群の総称語である「民間説話」の下位区分には「動物昔話」「（本格）昔話」「笑話」「伝説」が置かれていること，日本においては伝承群の総称語として「昔話」の語が用いられることがあり，その下位区分は柳田も関も「動物昔話」「本格昔話」「笑話」と認識していたことわかった。

第 7 章では，テキストとしての昔話や，概念としての昔話という視点から離れ，語りとしての昔話という体験的視点から「昔話とは何か」について再考した。もともと昔話とは語られるものであったが，語りから文字に置き換わる過程で「語りに要する時間の体験」「プロソディ（韻律)」「声の力」が失われたことを指摘した。また，日本語文法の奥体験と日本昔話の奥体験との親和性を踏まえながら，昔話がタブーへの感受性を周囲や後世に伝えるための方法であった可能性を仮説として提示した。タブーに触れてしまった場合に日本昔話に登場する主人公たちが取った対処法の一つは「逃走」であった。避けられないケガレや，人間関係が親密になれば付随しがちな秘密の側面（心理的結界）の取り扱い方については，日本の習俗から「価値転換」と「結界を守る態度」を取り上げて論じた。今後の課題として,「見るなの禁」などのタブーをテーマにした日本昔話を網羅的検索によって検討し，日本昔話に見る日本的な対応策について探ってみたい。

最後に，網羅的検索という方法論によって昔話世界を跡形もなく細分化してしまいかねない懸念に言及した。この問題については，昔話の類話の多さと類話の生成可能性という昔話の特徴を引用者がどのように理解しているかが重要となってくるだろう。昔話は普遍的側面を備えながら，同時に可変的側面も内包する有機的な素材であり，そのような特性があるからこそ昔話が私たちの心と理解に役立つ素材たりうると思われる。昔話を引用するにあたっては引用者自身が「昔話とは何か」を問いながら，さらに昔話の引用をもって何がしたいのかを意識しておくことが，昔話を心の理解のために活用する上では重要な姿勢であると考える。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本昔話を深層心理学的視点からとりあげ、日本的「たましい観」と「精神の破壊的側面」を提示した臨床心理学的な研究である。日本的精神観の破壊的側面としては、「狂（くるい)」、「山姥」、「アマノジャク」の各概念を抽出し、それぞれの精神医学的状態像と臨床的活用を例示している。なお、物語を臨床心理学的研究の題材として取り上げる際の恣意的引用を改めるために、「日本昔話大成」（以下「大成」）の全物語を対象に網羅的検索を行い、前記の各概念に対応する昔話群の分類を提示している。

本論は 7 章からなり、第 1 章では柳田國男の著作と関啓吾の「日本昔話大成」の昔話を網羅的に集約・検討することによって、「たましい」という語を用いて日本人が表現しようとしてきた共通の心象を検討している。第 2 章では「日本精神病名目志」、「日本霊異記」、「定本柳田國男集」（以下「定本」）から「日本的たましいの荒ぶる側面」として「狂」の概念を抽出し、さらに「大成」の全物語を対象に「狂」の状態像を分類し表にまとめ、狂に至る契機として喪失、天罰、悔しさ、妬みなどの心理状態を提示している。第 3 章と第 4 章では、「狂」の検討作業を通して中心的関連概念として浮かび上がった「山姥」と「アマノジャク」の状態像を「定本」と「大成」の記述をもとに検討するとともに、「大成」の全昔話を対象とした分類作業を行った。この分類作業は、物語の深層心理学的検討を目的とした今後の臨床心理学的研究における客観的指標となり得るものとして位置づけることができる。さらに、この二つの章では事例を例示し、これらの概念の臨床的活用を実証している。第 5 章と第 6 章は、昔話研究史と関連概念の概観に相当する章であり、民俗学と心理学を中心とした物語研究の歴史を辿りつつ、様々な物語のジャンルとの比較的な視点から昔話研究の意義を論じている。最終章である第 7 章では、体験としての昔話の意義を再考し、語りと感受性に支えられる臨床活動の根幹とのつながりが論じられている。

本論文は、こころの深層を体験した表現として昔話を捉えるスタンスを堅持しながら、イメージとしての昔話を臨床活動と関連づけることを目的としている。さらに、「大成」の全昔話を対象とした分類作業は、昔話研究が主観に頼りすぎる危険性を回避し、客観的指標を樹立することにも一定の成果をみることができたと評価できる。したがって、本論文が博士（臨床心理学）の基準を十分に満たす論文であると認めることができた。

以上

博士学位論文　内容の要旨及び審査結果の要旨　博甲第１１号

令和３年（２０２１）１０月１日発行

編集・発行　京都文教大学大学院臨床心理学研究科

〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足 80

TEL　0774-25-2426　FAX　0774-25-2498